



未来をつなごう！ 京都の 生物多様性

平成29年度版



第1章 「京都市生物多様性プラン」に基づく京都市の取組

第2章 和の花を育てる 5

「ノカンゾウ」「ホタルブクロ」「ワレモコウ」

京都市では、**生物多様性保全**の取組を進めています！

詳しくは、**京都市生物多様性プラン**～**生きもの・文化が育む未来**～
をご覧ください。

→わたしたちの生活は、生物多様性の恵みに支えられていることを御存知ですか？
→生物多様性の恵みである京都市の資源を活用した生活や経済活動を行いましょう！



平成30年3月発行 京都市印刷物第293245号

発行：京都市環境政策局環境企画部環境管理課

制作：第1章 京都市環境政策局環境企画部環境管理課

制作協力(五十音順)

京都ピオトップ研究会「いのちの森モニタリンググループ」/宝酒造株式会社

第2章 公益財団法人京都市都市緑化協会

「和の花を育てる 5」取材協力(五十音順)

<団体> 梅小路公園園芸セルフケア教室/京都学園大学/京都伝統文化の森推進協議会/京都府立京都学・歴史館/NPO法人KES環境機構/NPO法人国境なき環境協働ネットワーク/西尾市岩瀬文庫/京のアジェンダ21フォーラム/八坂神社

<個人> 秦賢二さん(園芸家)/藤井肇さん(大原野森林公園・森の案内人)/百生太亮さん(京都学園大学大学院生)

この印刷物が不要になれば
「雑がみ」として古紙回収等へ！

この印刷物は再生紙を使用しています。



未来つなごう！ 京都の 生物多様性

平成29年度版



目次 Contents

第1章

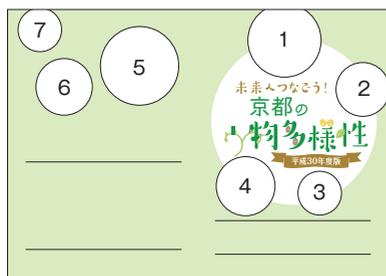
はじめに 生物多様性とその保全について	2
------------------------	---

「京都市生物多様性プラン」に基づく京都市の取組

・リーディング事業	4
・京都市における生物多様性保全関連事業	7
・団体・企業の取組	16

第2章

和の花を育てる 5	18
・ノカンゾウ	20
・ホタルブクロ	24
・ワレモコウ	30



表紙・裏表紙の写真／

1. 京エコロジーセンターの屋上ビオトープ
2. 京都市動物園のツシマヤマメネコ
3. ホタルブクロ
4. ノカンゾウ
5. ワレモコウ
6. メグスリノキ
7. 「子ども自然観察会」の様子(いのちの森モニタリンググループ)



生物多様性と その保全について



「生物多様性」ってなに？

生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは40億年という長い歴史の中で、様々な環境に適応して進化し、3,000万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接に、間接的に支えあって生きています。生物多様性条約では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性があるとしています。

(引用:環境省生物多様性ウェブサイト)



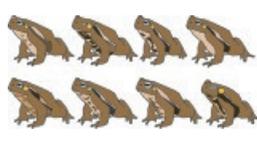
生態系の多様性

様々なタイプの
自然環境があること
(森林, 草原, 河川, 池沼など)



種の多様性

様々な種類の生きものが
生息・生育していること
(動物, 植物, 菌類など)



遺伝子の多様性

同じ生きものの種類の中にも
遺伝子による違いがあること
(形, 模様, 生態など)

なぜ「生物多様性」を守る必要があるの？

私たちの暮らしは、水・食料・繊維・木材等の供給, 自然災害(洪水や土砂災害)の発生の予防など, 様々な生物多様性の恵み(生態系サービス)により支えられ, 成り立っています。

とりわけ, 京都市の生物多様性は, 人々の安全で豊かな暮らしを支えるとともに, 食(京料理, 京野菜など), 祭祀, 庭園, 茶道, 生け花などの様々な伝統文化を育んできました。

しかし, 人の手による自然環境の破壊, 人間活動の縮小による里山の荒廃, 祇園祭の粽ちまきに利用するチマキザサや葵祭に使用するフタバアオイなどの固有生物の減少など, 自然環境の保全や伝統文化の継承に係る問題が発生しています。

京都の暮らしや文化を守り, 世代を超えて継承するためにも, 京都市の生物多様性が直面する様々な課題に対応し, 解決に努める必要があります。

京都市では どのような取組が行われているの？



京都市では, 京都ならではの自然環境や伝統文化を後世に受け継いでいくため, 目指すべき生物多様性保全の方向性を示す「京都市生物多様性プラン～生きもの・文化豊かな京都を未来へ～」を平成26年3月に策定し, 様々な取組を進め

ています。
本冊子では, 同プランに基づき実施しているリーディング事業や京都市の関係部署による多様な取組, また, 団体や事業者による生物多様性保全に関する取組について紹介しています。

「京都市生物多様性プラン」に基づく京都市の取組

Chapter_1 「京都市生物多様性プラン」に基づくリーディング事業

みやこ 京・生きものミュージアム～京都市生物多様性総合情報サイト～

京都の歴史や伝統文化を育んできた生物多様性に関する情報を配信し、皆様に生物多様性について理解を深めていただくための、生物多様性専用ホームページです。

生物多様性について楽しく学べる情報はもちろん、本市や様々な団体が主催するイベント情報や、専門家によるコラムなどを掲載しています。さらに、市内で見つけた生きものの発見報告や、生物多様性に関する意見交換を行う掲示板など、皆様に参加していただけるコンテンツも用意しています。生物多様性について関心を持っていただいた方は、もちろん、そうでない方も是非御覧ください。



アクセス数
月平均約2,100件
(平成29年4月から
平成30年2月までの実績)

京・生きものミュージアム
<http://ikimono-museum.com/>

親子生きもの探偵団

京都市の生物多様性を学び、保全に向けて行動する人を育てることを目的に、小学生とその保護者を対象に開催している自然観察会です。平成26年度からこれまでに21回開催し、延べ773名に参加いただきました(平成30年2月末現在)。平成29年7月に

京都御苑で開催した「親子生きもの探偵団」では、板倉豊先生(京都精華大学教授)と西台律子先生(京都自然観察学習会講師)に講師を務めていただき、モリアオガエルやオオシオカラトンボなどの観察や、採集したセミの抜け殻の標本作りを行いました。



京都市生物多様性保全活動登録制度

生物多様性保全活動に参加を希望する市民の皆様と、市民の皆様の協力を希望する保全活動団体を結び付けることで、生物多様性保全活動が効率的かつ効果的に行われることを目的とした制度です。登録の受付や制度の運用は、「京・生きものミュージアム」において行っています。

登録制度を活用してませんか? こんなあなたのための制度です!



登録していただくと…

- ①最新情報を入手できます!
生物多様性に関する様々な情報をメールで受け取り、参加したいイベント等を見つけることができます。
- ②団体の方は、情報発信が可能になります!
開催するイベント等の情報を「京・生きものミュージアム」に掲載し、広く参加を呼び掛けることができます。



地域生きもの探偵団

市内の小学校の児童が授業で生きものを観察する際に、京都市が専門家を派遣し、多様な生きものたちのつながり等について学んでいただく取組です。平成27年度からこれまでに17回開催し、延べ770名に参加いただきました。(平成30年2月末現在)。平成29年9月に開催した「地

域生きもの探偵団(安朱小学校編)」では、NPO法人ピオトープネットワーク京都の皆様にご講師を務めていただきました。学校の近くを流れる安祥寺川でバックテストを用いて水質調査を行った後、たも網を用いてカワムツやサワガニなどを捕まえました。捕まえた生きものは自分たちで名前を



調べ、その特徴について講師の方から解説していただきました。

まちかど生きもの観察記



子どもたちが京都市の豊かな自然に触れ、生きものをつなぐの大切さなどについて理解を深められるよう、身近なまちかどで発見した生きもの情報をまとめた作品を平成27年度から毎年募集しています。

平成29年度は、御応募いただいた作品131点の中から特に優れた21点を受賞作品として決定し、表彰を行いました。また、ゼスト御池、カナート洛北、京エコロジーセンターにおいて受賞作品の展示を行いました。応募作品の中には、植物や昆虫など身近な生きものの特徴や習性についての観察記録や、身近な場所での様々な生きもののお息状況を調べてまとめた図鑑やマップ、京都市が開催した自然観察会に参加し見つけた生きものについてまとめた作品もありました。



生物多様性セミナー

市民や事業者等の皆様に、生物多様性について理解を深めていただき、保全活動を更に広げていくため、平成26年度から毎年開催しているセミナーです。

平成29年度は、生物多様性保全における協働の重要性に

ついて考えていただくことを目的として開催しました。結社会デザイン事務所 菊池玲奈代表から御講演いただいた後、「京都市生物多様性保全活動登録制度」登録の、活動団体、NPO法人、行政など様々な立場から保全活動に関わっている4団体に活動事例を発表していただき、128名に御参加いただきました。



京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度

京都の祭りや文化を支えてきた生きもののお保全・再生のため、活動していただく団体の取組を認定し、必要に応じて技術的な支援のための専門家を派遣しています。平成

26年度からこれまでに18件の取組を認定し、204団体が、フタバアオイやフジバカマをはじめとする生きもののお保全・再生に取り組んでいます(平成30年2月末現在)。



Chapter_2

京都市における生物多様性保全関連事業

京都市では、生物多様性保全に関連する多様な取組を行っています。

環境政策局地球温暖化対策室

京都市環境保全活動センター(京エコロジーセンター)における生物多様性関連事業

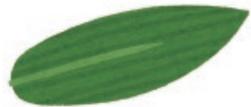
京エコロジーセンターでは、環境ボランティアと共に、屋上ビオトープの管理を行い、暮らしと自然や生きものとのつながりを学ぶ場所として提供しています。また、小学校1年生から4年生までとその家族の方を対象として、作物の栽培、生き物観察及びエコクッキングなどに年十数回継続して取り組んでもらう「エコそらキッズ」というプログラムを実施しています。様々な生物が観察できるとともに、栽培は、できる限り種から生長の様子を観察し、作物は全て収穫するのではなく、一部は種を付けるまで世話をすることで次の種まきにつなげ、命の循環を感じる事ができるプログラムです。



京都環境賞

環境に関する市民の皆様の関心を高め、様々な実践活動の更なる推進を図ることを目的に、環境保全に貢献する活動を積極的に実践されている市民や事業者の皆様を顕彰しています(応募期間:毎年6月1日~8月31日)。

平成29年度(第15回)の京都環境賞は、放置竹林問題の解決に向け、竹の産業資材化等に取り組まれている「里山資源」が大賞を受賞しました。大賞以外では、チマキザサの再生保護活動等に取り組まれている「チマキザサ再生研究会」をはじめ、生物多様性保全に取り組まれている団体が多数受賞しました。



梅小路公園における生物多様性

京都駅西部エリアには、まちなかの憩いの空間「梅小路公園」があり、園内では、日本庭園「朱雀の庭」や復元型ビオトープ「いのちの森」などで四季折々の風景が見られます。庭園では毎年春・秋に京都ゆかりの希少な「和の花」を紹介する展示会が開かれ、庭園外でも来園者に和の花に親しんでいただけるよう植栽がされています。ほかにも、「水と共につながる、いのち。」をコンセプトとする京都水族館は、山、里、川から海までの多様な生態系を学べる場所となっています。「いのちの森」や京都水族館では、京都市や近隣の小学校などとの連携で、観察会や生きものに親しむ様々なイベントが開かれています。



京の旬野菜推奨事業

京都市内では、京の伝統野菜をはじめ、個性豊かで多種多様な野菜が四季を通じて生産されています。

京都市では、市内産野菜の生産拡大や市民の健康増進、流通・販売における環境負荷の軽減を目的に、環境にやさしく、栄養価も高い旬の時期に生産される野菜を「京の旬野菜」として、京の旬野菜生産者の認定や販売促進のキャンペーンに取り組んでいます。

キャンペーンは平成13年から毎年開催しており、これまでに100を超える市内の直売所や旬野菜の試食会等を通じて京の旬野菜の啓発を行ってきました。



京都らしい森づくりの推進~京都三山の森再生~

立地条件が悪い荒廃した人工林を対象に、京都らしい森林景観の形成や土壌流出の防止、生物多様性の保全を目標とした先進的な森林再生モデル事業に取り組んでいます。

シカの食害に加え、外来生物の繁殖、種子供給源となる母樹減少などが原因で自然の回復力が低下している中、できるだけ早く適地適木の考え方を基本とした植栽を行うなど、自然と先人の知恵に学ぶ技術を応用しています。

平成29年度は、きふね貴船川沿いにおいて、市内でも珍しいカエデの仲間メグスリノキ(写真下)の保全や、京都府レッドデータブック絶滅寸前種のキブネダイオウの自生地復活も目指した森づくりを行いました。



京の苗木の販売

森づくりに使う苗木は、遺伝子の交雑を防ぎ、地域固有の自然を守るために、地域に自生する樹木の種子から育てた「地域性苗木」を使うことが大切です。

このため、京都市は、平成22年度から、京都固有の地域性苗木の生産及び供給ができる体制整備を進め、平成24年5月に農林業や造園業に関わる方々を中心とする「京の苗木生産協議会」を設立しました。

平成25年度から「京の苗木」の販売を開始し、平成29年度は、コバノミツバツツジやヤマコウバシなど70種を販売しております。建物外構の緑化にも、「京の苗木」を使うことができますので、御利用ください。



八丁平(久多市有林)の保全管理

八丁平は左京区北部にある峰床山や滋賀県との県境の山並みに囲まれた標高約810mの盆地です。中央には近畿地方では珍しい高層湿原が広がっており、多様な動植物たちが生息しています。豊かな自然が残る八丁平は京都丹波高原国定公園の第1種特別地域とされています。

近年、ニホンジカが増加し、八丁平の植生に影響が出てきました。京都市では、シカの食害から貴重な植物を守るため、高さ2mの積雪の重みにも耐えられる柵を設置し、京都府レッドデータブック準絶滅危惧種のカキツバタ(写真上)や絶滅寸前種のヤチスギランなどを保護しています。



京都市三山森林景観保全・再生ガイドラインに基づく森林景観づくりの推進

京都の都市景観を形づくる三山の森林景観の保全・再生を目的とした同ガイドラインに基づき、京都を代表する景勝地の一つである小倉山において、景勝・小倉山を守る会により、定期的な森の手入れや民間企業などの協働による植樹活動に取り組んでいます。

また、上賀茂本山では、上賀茂学区の住民を中心に、本山を地域の身近な森として活用するため、森の手入れを兼ねた散策路づくりに取り組むほか、金閣寺と隣接する森林では、立命館大学の学生によるアカマツ林の保全活動に取り組んでいます。



住民参加による川づくり(有栖川を考える会)

一級河川有栖川の整備においては、「人・まち・自然・歴史をおりなす有栖川～川は生命の源、清き流れを未来に～」を整備テーマとして、住民参加による川づくりを行っています。

平成11年度には、地元の方々、学校及び行政と一緒に考えていく場として「有栖川を考える会」が発足し、川に関心を持ち、大事にする気持ちを育むために、児童をはじめとした地元の方々による河川清掃活動や水生生物の観察などを行っています。

また、平成29年6月のホテル観察会では、ホテルの乱舞に歓声が上がリ、豊かな自然環境の大切さに触れることができました。



道路の森づくり事業

「京都市緑の基本計画」に基づき進めている、道路の森づくり事業は、幹線道路の中央分離帯に新たにケヤキ等の高木を植栽することで、都市化により減少した「緑」を取り戻すとともに、周囲の山々・河川・公園などをつなぐ「水と緑のネットワーク」を形成し、多様な昆虫類や鳥類が移動できる緑環境を整えることなどを目的に行っています。

平成21年度から堀川通、烏丸通、北大路通等の幹線道路(約2.5km)の中央分離帯に約1,000本の高木(ケヤキ、サルスベリ等)を植栽してきました。



チマキザサ再生プロジェクト

かつて左京区北部の花脊^{はなせ}地域に多く生育したチマキザサは、祇園祭の厄除け粽^{ちまき}の原材料として使われるとともに、他産地のササと違い表面に毛がないことから、和食^{わいしょく}の掻敷や和菓子の包装に用いられてきました。しかしながら、左京区北部のチマキザサは、10年ほど前に、一斉に開花・枯死した後、若芽がシカの食害を受けたため、現在、激減しています。

京都市では、左京区北部のチマキザサを再生させるため、幅広い方々の協力・支援をいただきながら、防鹿柵設置などの保全活動や、地元小学校や企業への啓発活動、伝統的な加工技術の伝承などを行っています。



新林^{しんばやし}小学校自然観察会

洛西支所では、子どもたちに、洛西ニュータウンの豊かな自然に触れ、全ての生き物が生態系でつながっていることを体験してもらえよう、洛西地域の小学校と連携して自然観察会を行っています。

平成29年度は、新林小学校の4年生が京エコロジーセンターのスタッフやフィールドソサイエティの久山喜久雄先生の御協力のもと、小畑川^{おぼたがわ}の生き物や周辺の植生を観察して、小畑川の生き物マップを作成しました。

3日間の学習で、環境の変化が生き物に大きな影響を与えることを学び、自然を守る大切さを改めて感じてもらいました。



花背山の家

京都市立小学校では、子どもたちの感動する心、自然生命尊重精神、環境保全に寄与する態度を養うとともに、仲間意識や責任感、規範意識など豊かな人間性や社会性を育むことを目的とした長期宿泊・自然体験推進事業を実施しています。

京都市立小学校のほとんどが利用する花背山の家では、同事業をはじめとする宿泊的行事を行う学校を対象に、所内の生きものを観察することで自然への理解を深め、環境保全の大切さを実感する「自然観察」等の様々な自然体験に関するプログラムを実施しています。



京都市動物園



明治36年、日本で2番目の動物園として開園した京都市動物園は、平成21年から7年間の全面リニューアルを経て、平成27年にグランドオープンしました。今や動物園は、世界とつながり、絶滅の危機に瀕した貴重な動物種を、飼育下で繁殖させ、遺伝的多様性を保つことが求められています。京都市動物園もこれまでに、ゴリラをはじめとして様々な希少種の繁殖に貢献してきました。



◆ ツシマヤマネコの飼育下繁殖

ツシマヤマネコは長崎県の対馬にだけ生息する、国の天然記念物に指定されている希少種です。京都市動物園では、環境省及び公益社団法人日本動物園水族館協会と協力して、ツシマヤマネコを動物園で繁殖させ、将来的に対馬に野生復帰させることを目指しています。平成29年5月、2頭の子猫が生まれました。九州以外では初めての出産で、帝王切開のため人工哺育となりましたが、元気に成長しました。今後も各地の動物園と協力しながら、繁殖事業に取り組んでいきます。



◆ 「京都の森」での環境教育



京都市動物園の「京都の森」は、環境教育の場としてリニューアル時に新たにオープンしました。琵琶湖疏水から引かれた水が流れる京都の森では、地域の小学校や来園者と協働して棚田で稲を育てるほか、琵琶湖水系で絶滅の危機に瀕する淡水魚、イチモンジタナゴの繁殖にも取り組んでいます。ゾーン内を流れる小川では、地元NPOと協力してホタルを繁殖させる事業にも取り組んでいます。

京都市青少年科学センター



科学者精神(科学的なものの見方、考え方、扱い方及びこれを活用する心構え)を体得した市民を育てることを目的に昭和44年に設置されました。「ティラノサウルス」「人間万華鏡」「できた!竜巻」など多くの迫力ある展示品のほか、「プラネタリウム」「チョウの家」「親子ふれあいサイエンスルーム(対象:乳幼児・保護者)」等もあり、科学の不思議を楽しく体験・学習できます。

◆ 展示品「むしむしワールド」

オオセンチコガネ※をはじめとする昆虫の標本や写真を通して、生物多様性について考えることができる、高さ約3m×横約7mの大型展示品です。標本の色や大きさによる並び替えができるパズルコーナーもあります(平成28年3月から公開開始)。

※オオセンチコガネ
体長約2cmの小型の甲虫(コウチュウ)で、赤や緑、青色の金属光沢を持つ。京都市周辺の里山や山地で普通に見られる。



◆ 自然観察教室



小学校4年生以上(小学生は保護者同伴)を対象に年3回、外部から専門の講師をお招きし、近郊の豊かな自然環境の中で岩石・鉱物やきのこ、野鳥などの観察を行う「自然観察教室」を実施しています(定員は各40名。申込方法等の詳細はホームページ参照)。

<http://www.edu.city.kyoto.jp/science/>

<各回のテーマ(平成30年度)>

- 「大文字山の地学」(6月)
- 「稻荷山のきのこ」(10月)
- 「鴨川と京都御苑(又は植物園)の野鳥」(1月)



団体の取組

京都ビオトープ研究会

いのちの森モニタリンググループ



平成8年に開設された梅小路公園内の「いのちの森」は、都市空間に自然の生態系を復元したビオトープで、京都ビオトープ研究会「いのちの森モニタリンググループ」は、草木のないところからできたこの森が、どのように育ち、鳥や昆虫などの生きものがどのように生息するようになるのか、生態系の変化を20年以上にわたり継続調査しています。また、調査を踏まえて植物や生きものを観察する「自然観察会」を行っています。

◆モニタリング調査

「いのちの森」開設半年後の平成8年10月から継続して、どんな生きものが新たにすみつくのか、あるいは逆に減っていく生きものがあるのかを、植物・きのこ・鳥類・昆虫について、研究者、市民、学生からなる調査グループが、追跡調査（モニタリング）をしています。毎年、調査の報告書を発行し、研究会ホームページでも公開しています。

<http://inochinomori.sakura.ne.jp/>

また、この調査結果の一部は、書籍「いのちの森：生物親和都市の理論と実践」「景観の生態史観」でも紹介されています。



◆自然観察会



毎月第3土曜日に開催される、いのちの森の「自然観察会」講師として、植物・昆虫・鳥・きのこなど月ごとのテーマに沿って、市民と共に生きものを観察しています。

また、小学生を対象とした「子ども自然観察会」にも講師として参加し、いのちの森の生きものの観察を通して、自然の大切さを学ぶことができる、環境学習、自然体験の場づくりを担っています。

企業の取組

宝酒造株式会社

宝酒造 田んぼの学校



宝酒造「田んぼの学校」は、次世代を担う子どもたちに自然環境を守ることの大切さ（環境教育）や自然の恵みのありがたさ（食育）を伝えることを目的として、平成16年から開校しています。小学生とその御家族を対象に、5月から12月までの約半年間に京都府南丹市園部町の田んぼと京都市内のッキングスクールにて、稲作体験や自然観察、料理教室などの授業を4回にわたって行います。

◆年4回の授業内容

第1回の「田植え編」から「草取り編」「収穫編」までの授業は、田植えや草取り、稲刈り、脱穀体験などのお米づくり体験と田んぼ周辺等の植物や昆虫などの生きものの観察（自然観察）です。自然観察では、特に五感を使った観察を重視しています。第4回の「恵み編」の授業は、みんなで育てたお米を使って親子で正月にちなんだ料理を作ります。また、収穫した稲わらを使って、正月にかかせない「注連飾りづくり」を体験します。



◆社外の協力を得て運営



田んぼの学校は、社外の様々な方の協力を得て運営しています。企業である当社主催のもと、地元農家・行政・NPO法人の協力をいただいています。地元農家の方々には稲作体験や注連飾りづくりの講師を、行政では京都府の後援を得ています。NPO法人は、NPO法人森の学校とNPO法人自然観察指導員京都連絡会の協力を得ており、それぞれ企画・運営支援や自然観察の講師をお願いしています。

和の花を育てる 5



ノカンゾウ
ホタルブクロ
ワレモコウ

コラム
京都の医師・本草家と
公家歌人の
比叡山フィールドワーク
和の花保全ネットワーク

※写真はワレモコウの葉
画は医師・本草家の山本亡羊
(京都府立京都学・歴史館所蔵)

制作協力  公益財団法人 京都市都市緑化協会 GREENERY ASSOCIATION

第2章は、公益財団法人京都市都市緑化協会(以下、「緑化協会」という。)の監修で制作しました。本章は、緑化協会が発行した「和の花を育てる1」、京都市が発行した「和の花を育てる2~4」の続編となっています。

はじめに

かつて京都の暮らしの中で利用され、身近に親しまれてきた植物は、生活様式や都市・森林の環境の変化などで失われつつあります。

冊子「和の花を育てる」シリーズでは、京都ゆかりの植物などについて紹介しており、今回は、ノカンゾウ、ホタルブクロ、ワレモコウの3種を取り上げます。いずれも、現在では自生種を身近に見かけることがなくなった植物です。

また、今回は近世の京都で活躍した医師・本草家の山本亡羊と公家歌人のちくまありこと(ぼうよう)を取り上げ、比叡山にて採取した薬用植物などについても紹介しています。

これらの和の花は、梅小路公園にある朱雀の庭にて年に2回開催している春と秋の「和の花」展示会で順次紹介しています。



これまでに紹介した植物
「和の花を育てる1」:エイザンスミレ、フタバアオイ、オケラ、フジバカマ
「和の花を育てる2」:キキョウ、ヒオウギ、キクタニギク
「和の花を育てる3」:ショウジョウバカマ、クリンソウ、オミナエシ
「和の花を育てる4」:カザグルマ、アヤメ、カワラナデシコ

植物に接する際のマナー

野生植物を絶滅に追いやる原因の一つは、園芸目的の乱獲といわれています。「美しいから、かわいいから」といって、野山から植物を持ち帰らないようにしましょう。

山野草は種から花を咲かせるまでに、長いもので10年程度かかるものもあります。また、掘り起こして持ち帰っても、そのほとんどは根付かずに枯れてしまいます。

山野草は、信頼できる山野草店から入手しましょう。

ノカンゾウ 野萱草 (ススキノキ科またはワスレグサ科 多年草)

- ・学名: *Hemerocallis fulva var. longituba*
- ・分布: 本州以南, 朝鮮半島~中国大陸北部
- ・花期: 7~9月
- ・京都府RD^{※1}: 絶滅危惧種
- ・環境省RL^{※2}: 記載なし

※1 レッドデータブック
※2 レッドリスト

ノカンゾウの花茎は50-70cmあり, 花は一日でしぼんでしましますが艶やかな色をしています。日本の原野に多く自生しているのでノカンゾウと呼ばれます。別名には, ワスレグサ, シノブグサ, ヤボキナなどがあります。ワスレグサ属の仲間は, 東アジアの温帯, 中国大陸, 朝鮮半島, 日本に約15種が自生しています。同じ一日花ですが, 種類によって開花時刻が異なります。ノカンゾウ, ヤブカンゾウ, ホンカンゾウ, ゼンテイカ(ニッコウキスゲ)は朝に咲いて夕方にしぼむ「昼咲型」で, ユウスゲ(キスゲ)は夕方に咲いて翌朝にしぼむ「夜咲型」で芳香があり, 7~8月に開花します。北海道に自生するエゾキスゲは夕方に開き出して翌日の午後まで咲き続ける「夜昼咲型」で, 6~7月と秋にも開花します。

ノカンゾウは, 一重咲きで, 花色に変化が多く, 特に赤色の強いものをベニカンゾウと呼ぶことがあります。私たちが身近に見るよく似た花は, 中国原産のヤブカンゾウで八重咲きです。

また, 東京近郊では, 葉が細く, 花被片も狭いものがあり, ムサシノワスレグサと名付けられ, ユウスゲとノカンゾウとの雑種とみられています。

【参考文献】佐竹義輔, 大井次三郎, 北村四郎ほか「日本の野生植物 草本I 単子葉類」平凡社, 1994



ヤブカンゾウ (中国原産)

ヤブカンゾウは, オニカンゾウとも呼ばれ, ノカンゾウと同じように原野などに生育しているものもありますが, 特に人家で栽培されています。ノカンゾウよりも花や葉も大ぶりで花茎は40-90cmあり, 八重咲です。北海道~九州, 中国大陸に分布しています。もとは中国原産で, 古くに渡来して各地に広がったものとされています。



有用植物としての“ノカンゾウとヤブカンゾウ”

ノカンゾウは, 北日本の地域やアイヌ民族の間では山菜として食されます。富山から飛騨では, アマナ, ショーブナ, 東北から北海道にかけてはカッコナ, カッコなどと呼ばれているようです。カッコナ, カッコの名は, カッコウの鳥が鳴く頃に花が咲くことから呼ばれ, 川にマスが遡り始める合図ともされます。さつとゆでて三杯酢などであえて食用にされます。



中国原産のヤブカンゾウは, 花の蕾が針状であることから金針菜と呼ばれます。中国では, この若芽を摘んで食べるといやな悩みを忘れるとの言い伝えがあり, 漢方薬として利用されます。成分に鉄分やメラトニンを含み, 緊張の緩和や睡眠を促進することから「忘憂草」とも呼ばれるようです。日本の自生種であるノカンゾウは種を付けますが, ヤブカンゾウは, 種子ではなく挿し芽や球根によって殖えます。このような植物が日本全土で見られるということは, 有用な植物として農耕と共に人の手によって広まったと考えられています。

文学の中の“忘れ草”

ノカンゾウは, 古今和歌集や源氏物語, 万葉集, 枕草子と多くの古典にも登場し, 親しまれています。源氏物語では, 萱草色は喪に服す色や亡き人をしのぶ色として用いられたようです。



萱草色



平安時代末期の説話集「今昔物語集」に集録の「兄弟二人殖萱草紫苑」には, ヤブカンゾウとシオンの草花が登場します。二人の親孝行な兄弟が親の死を悲しみ, 兄はこの悲しみを早く忘れ仕事に復帰しようとヤブカンゾウ(萱草)を墓に植え, 一方弟は親の事を忘れまいとシオン(紫苑)を植え, 毎日墓参りを欠かしませんでした。

その様子を見ていた墓を守る鬼が心を打たれ, 弟には明日を予見できる力を与えたことにより, たいそう成功して幸せに暮らすことができたといひます。これらの伝説からヤブカンゾウを「忘れ草」, シオンを「思い草」と呼ぶようになったそうです。



【参考文献】福岡ト子「アイヌ植物誌」草風館, 2000
麓次郎「四季の花事典」八坂書房, 1999, 吉岡幸雄「王朝のかさね色辞典」紫紅社, 2012

ノカンゾウの特性

ノカンゾウから“ヘメロカリス”

ヨーロッパには、18～19世紀に中国や日本からノカンゾウの仲間が渡りました。第二次大戦後には更に多くの野生種が伝わり、改良され作り出された品種を、“ヘメロカリス”と呼びます。“ヘメロカリス”は、ギリシャ語で「一日の美しさ」の意味を持ち、英名はデイ・リリー（Day Lily）です。

欧米では、品種改良が盛んで、花色もセピア、栗茶色、暗桃色などがあり、広く楽しまれ人気を誇る花の一つです。

【参考文献】麓次郎「四季の花事典」八坂書房、1999、浅山英一「花と草花の事典」講談社文庫、2010

花は大輪で丸弁が特徴



ヘメロカリス「ゴールデン・ブライズ」



山形県飛島の「トビシマカンゾウ」から品種改良されたもの

ヘメロカリス「ミカド帝」

花は大輪で八重咲が特徴



ヘメロカリス「ダブル・レッド・ヘッド」

◆栽培

【日頃の手入れと水やり】

土は常に湿気のある環境を好みますので、鉢植えでは特に夏場は水切れしないように注意します。

【用土】

土質は特に選びません。

【殖やし方】

播種と株分けで殖やすことができます。丈夫で作りやすく、日当たりと施肥量を確保するとよく育ちます。秋の彼岸頃に株分けすると良いです。仲間のゼンテイカやユウスゲなどは種から育てるのも容易で、2年で花が付きます。

根の生育が旺盛で株も大きく育つため、3年に一度は株分けをし、肥料を入れて大きめの鉢に植え付けます。株分けなどの植替え時に、古くなった根は短く切り詰めてかまいません。

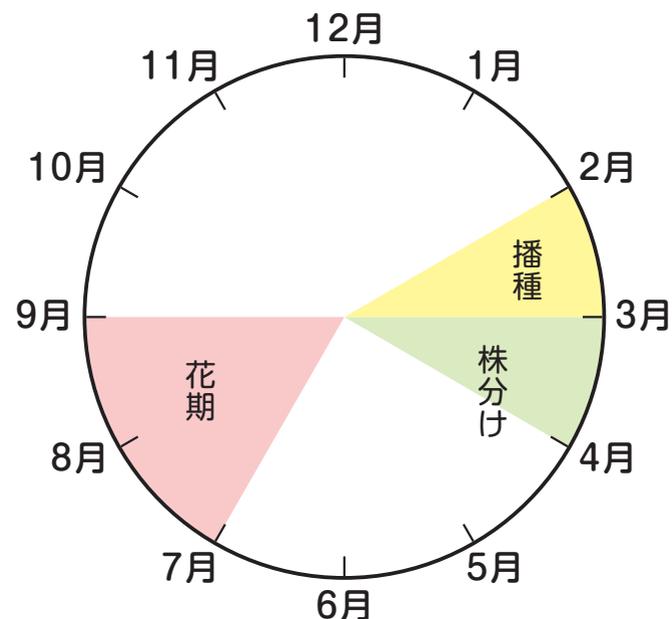
【病虫害】

春先から秋にかけてアブラムシに注意し、見つけ次第除去します。

【播種の方法】

開花後の秋頃に種を取っておきます。

栽培スケジュール



ノカンゾウはあまり見かけんようになっただけで、ヤブカンゾウはぎょうさんある。なんぼでも殖える。

ノカンゾウ京の口伝

ヤブカンゾウの方は、世話いらずで、放っておいても生きてくるえ。



ホタルブクロ 蛭袋 (キキョウ科 多年草)

- ・学名: *Campanula punctata*
- ・分布: 北海道~九州, 朝鮮半島, 中国大陸
- ・花期: 6~7月
- ・京都府RD: 記載なし
- ・環境省RL: 記載なし



京都の希少な ヤマホタルブクロ

ヤマホタルブクロ (キキョウ科 多年草)

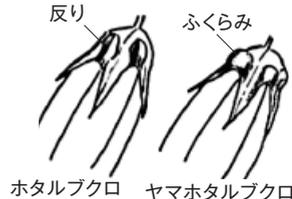
学名: *Campanula punctata* var. *hondoensis*

分布: 本州 (東北から中国)

花期: 6~7月

京都府RD: 絶滅危惧種
環境省RL: 記載なし

京都府内では、ホタルブクロの仲間でも、ヤマホタルブクロが京都府RDで絶滅危惧種として分類されています。標高の高い場所に生育します。ホタルブクロとの違いは、萼片の反り返りの有無で見分けることができます。



ホタルブクロ ヤマホタルブクロ

ホタルブクロの大きな釣鐘形の花は、白から淡い紅色まで変化に富んでいて観賞に楽しみのある花です。茎の高さは40-80cm程度、花冠は4-5cmの長さがあります。日本の山野や丘陵に生えています。和名の「蛭袋」は、昔、子どもがつかまえたホタルを花に入れて持ち歩いたことから名付けられたといわれています。

【参考文献】佐竹義輔, 大井次三郎, 北村四郎ほか「日本の野生植物 草本I単子葉類」平凡社, 1994

新潟県南佐渡では、ホタルブクロは「オイヨ花」と呼ばれます。オイヨとは体長2m, 体重80-100kgもあるハタ科のイシナギという海の魚で、海辺の岩礁に産卵をしに、6月のホタルブクロの花が咲く頃にやってくることから名付けられたとされています。青森県では、「あっぱちち」(母の乳房)とも呼ばれ、目線の低い子どもには花のふくらみが母親の乳房に似て見えることからそのように名付けられたそうです。また、「灯笼花」や「狐の提灯」とも呼ばれ、音遊び、占いなど子どもたちの遊びにも使われました。

【参考文献】長澤武「植物民俗」法政大学, 2001

マルハナバチとホタルブクロ

ホタルブクロの花は、ポリネーター(花粉媒介者)であるマルハナバチに特化した形と大きさになっています。マルハナバチが花の中に潜り込み、登るときに花粉が背中に付着します。花粉は開花後、2~3日間付着しています。

【参考文献】東京山野草会「タネから楽しむ山野草」農山漁村文化協会, 2005



大きなマルハナバチがいる地域のホタルブクロの花は大きくなり、マルハナバチが小さいと花も小さくなる。

研究最前線

ヤマホタルブクロやウツボグサは、山の標高が上がるにしたがって花が小型化することが知られていました。この小型化は標高そのものに影響されたものではなく、分布するマルハナバチ類のサイズに適応した生態的分化によるものであることが分かりました。このことから、温暖化による影響から保全すべきなのは、これまでひとくりにされてきた山岳植物の「種」とは限らず、より細かく分化した「生態型」である可能性が示唆されました。

【参考文献】信州大学, 筑波大学市野隆雄[他]「中部山岳地域における標高傾度に沿った草本植物の遺伝的・生態的分化」地球環境 Vol.19 No.171-78, 2014

先駆植物-パイオニア植物

ホタルブクロは、道端の崖や火山礫地、自然や人によって攪乱されたような地いち早く生じ適応します。このような植物は、先駆植物(パイオニア植物)と呼ばれ、富士山の頂上付近に見られるオンタデ、フジアザミなどのようにパッチ状に殖えていきます。それらの株を軸にして土が堆積し、雨水が集まり、樹木のような種が育つ環境ができ、やがて草地から森林へ遷移していくという関係性があります。



モミジの幹下に広がったホタルブクロ (梅小路公園セラピーガーデン)

ホタルブクロの特性

ホタルブクロの葉は、地表に葉が広がる形(ロゼット型)で冬を越し、5月頃に花茎が伸び出して6~7月に開花します。ホタルブクロの根は地下茎を伸ばして広がっていきます。殖え広がった株は地下茎でつながっていますが、丈夫ですので、切り離しても問題ありません。



地下茎が伸びて殖えていく

乾燥にも強く、真夏は半日陰を好みますが、それ以外の季節は日の当たる場所でも生育します。

◆栽培

【日頃の手入れと水やり】

乾燥にも強く、鉢植え、地植え共に放っておいても良く育ちます。

【用土】

土質は特に選びません。

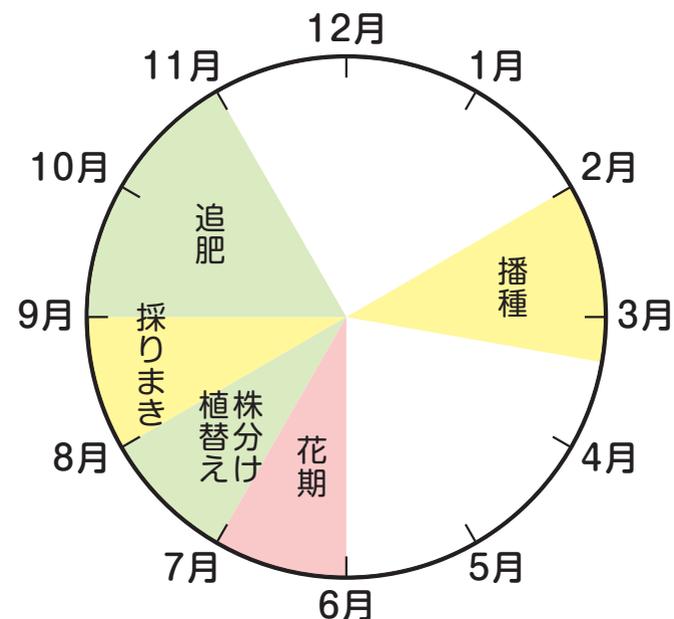
【殖やし方】

株分け、播種共に育てやすく簡単に殖やすことができます。花が咲き終わった後に、株元から小さな芽がたくさん発芽しますので、これを切り離して鉢上げし、育てても良く育ちます。種の結実には、遺伝的に異なった株が必要です。自家受粉では種ができてにくい場合があるため、株元に芽吹く若い芽を育てる方が容易です。長く鉢植えで育てていると、根詰まりして枯れてしまうことがあります。

【病虫害】

特に心配は要りません。

栽培スケジュール



富士山で見るのは
白いのばかりやったん tochigau?

ホタルブクロ京の口伝

毎年、株元に小さい芽が
ぎょうさん出てくるえ。



「山城採薬目録」
山本七羊

山本七羊「山城採薬目録」(28ページ参照)から、ホタルブクロは、白川山、叡山無動寺西塔、叡山横川、貴船鞍馬、宇治、鷲峰山、笠置山で採薬されていたことがわかります。

(画:京都府立京都学・歴史館所蔵)

山本亡羊 (1778~1859) の私塾“平安読書室”

医師・本草家 ^{ぼうよう} 亡羊



(画:京都市立京都学・歴史館所蔵)

医師で本草家の山本亡羊は16歳の頃から小野蘭山^{おのらんざん}に師に学び、油小路五条にあった山本家の私塾「平安読書室」にて1798年に薬草園を開設しました。亡羊は、儒医として患者を往診しながら、自ら薬草の栽培にも励み、数千の草木を育てました。薬草園の規模はやがて300坪に達し、各地から儒学や本草を学ぶ者が多く訪れました。また亡羊は、採薬を授業の一環として、京都の山々を春秋と夏期に繰り返し登って山城周辺の植物分布を明らかにしました。公家や門跡の中で学んだものも多く、一條忠香^{いちじょうただたか}公、岩倉具集^{いわくらともあひ}や千種有功^{ちくさありこと}もその一人でした。

【参考文献】「読書室200年史」山本読書室、1981、「山本亡羊先生小傳」旧京都博物館、1909

京都の医師・本草家 山本亡羊と 公家歌人 千種有功の 比叡山フィールドワーク

「おもふまことの」公家歌人 千種有功 (1796~1854)

公家出身の千種有功は、歌道宗匠家入門し、伝統的な歌学を学び歌壇に名を連ねていたにも関わらず、これまでの格式高い歌風とは異なり、飾らずに自らを偽ることもなく心思うまを詠む自由なる歌人でした。「一声のやま時鳥^{ほととぎす}あはやとていつれば袖にかかるむらさめ」(一声鳴いた山ホトギスの声に、「あれっ」と驚いて外に出てみると、鳥の声はもうせず、かわりにわか雨が袖におちてきた。)に詠まれるように、この時代の伝統的な和歌には見られない軽く明らかな表現が有功の歌の特徴です。

【参考文献】久保田啓一「近世和歌集」2002、盛田帝子「近世雅文壇の研究」2013

公家歌人 ^{ありこと} 有功



比叡山の薬草50種を歌った 「天台採薬和歌」

有功は亡羊の誘いで比叡山へ薬草採集に訪れた際に、亡羊が山を登りながら矢継ぎ早に草花の名や薬効を言い進む博学ぶりに感銘し、「しら露が消えるように忘れ去る草の名を あなたのようによく心に染めとめたい。」と50種を和歌にして「天台採薬和歌」に残しています。それらの歌には、当時比叡山の奥深い山に咲く草花と出会ったときの印象や生育場所の様子、何とか草花の名やその特徴を覚えたいという有功の素直な心情があらわれています。亡羊の採集場所は、比叡山のほかにも、牛尾山^{うしおざん}、御蔭^{みかげ}、貴船^{きふね}、嵐山^{あらしやま}、宇治^{うぢ}、醍醐^{たご}などがあり、京都周辺の薬草の分布を知り尽くしていたようです。

【参考文献】山本亡羊「山本亡羊採集目録」、小椋純一「絵図類の考察からみた江戸末期から室町後期における京都近郊の植生景観」京都府、2002

比叡山採薬ルート



亡羊は夜に出発し、八瀬の長谷出^{はやくせのながせで}(走出)という所から摘み登りしながら坂本の無動寺^{むどうじ}に至り、白川山の峯や谷を摘みつつ帰る道をたどったようです。

専門家の研究から、江戸末期頃の比叡山の植生は、現在とは異なり、主にアカマツや低い樹木が植わっていて、山肌が露出しているような所も多かったと考えられています。

「天台採薬和歌」に歌われた薬草

● 白い山すみれ

よのうきめ みぬ大ひへの山すみれ
住みて年をも つまんとそおもふ

世の憂き沈みに無縁の比叡山の山すみれ(エイザンスミレか?)、住み続け年を重ねても摘んでほしいと願う。
※京都府RD…絶滅寸前種



● 叡山ゆり

夏しらぬ ひへの山ゆり 花さか
一もとおくれ 木こりしは人

夏を知らない比叡山のヤマユリ、花が咲くのはひと季節遅れると出会った木こりの人が言う。
※京都府RD…絶滅種

● いかり草

大ひへの 谷のそこなる いかり草
雲の波こそ 立かくしけれ

大比叡の遙か遠い谷底にイカリソウが咲いているのを見つけたけれど、雲のように霧がかかり隠れてしまったよ。
※京都府RD…要注目種



【参考文献】「天台採薬和歌」西尾市岩瀬文庫所蔵

ワレモコウ 吾木香 (バラ科 多年草)

- ・学名: *Sanguisorba officinalis*
- ・分布: 北海道～九州
- ・花期: 7～10月
- ・京都府RD: 記載なし
- ・環境省RL: 記載なし

ワレモコウは、日当たりのよい山野に生える多年草です。日本のほかに中国大陸、朝鮮半島、ヨーロッパ及びシベリアにも分布しています。古くには若い葉を食用として利用することもあったようです。

ワレモコウは、宮庭庭園で読まれた中国の漢方書「神農本草経」に中品の薬草として掲載されています。古名は、地榆（「ちゆ」又は「じゆ」）と呼ばれ、根の部分薬として使用し、殺菌や収れん作用によって、痛み止めや止血などに利用されてきました（主成分: タンニン、サポニン）。

最近、日本では、育毛剤や化粧品にエキスなどが利用されています。

英名では、グレートバーネットと呼ばれます。



京都の希少な コバナノワレモコウ

コバナノワレモコウ (バラ科 多年草)
学名: *Sanguisorba tenuifolia* Fisch.
var. *parviflora*

分布: 本州 (近畿以西)、四国、九州、
朝鮮半島、中国大陸東北部
京都府RD: 絶滅危惧種
環境省RL: 記載なし

京都府内では、山城地域の一部で見られるだけで、生育地が貧栄養湿地に限られ、個体数もごく少ないです。

コバナノワレモコウが希少となった理由に、湿地の開発や道路の新設によるものがあげられています。ほかに花穂の太さが6mmを超えて太長いものはナガボノワレモコウと呼ばれ、関東に多く、西日本でも見られます。府内のコバナノワレモコウは、種子からの系統保存が試みられています。栽培は比較的容易です。

【参考文献】京都府レッドデータブック 2015

「源氏物語」にあるワレモコウ

ワレモコウの名は、源氏物語に初めて登場し、平安時代に京都で名前が広まったようです。平安時代の宮庭庭園では、ワレモコウを植えて秋の野原をかたどった景色が庭園に造られていたとされています。「源氏物語」匂宮の巻には、庭の前栽に植わる植物について、次のように綴っています。

「御前の前栽にも、春は梅の花園をながめたまひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にも、をさをさ御心移したまはず、老を忘る菊に、衰へゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れの頃ほひまで思し棄てず、などわざとめきて、香にめづる思いをなん」云々とあり、移りゆく季節に感じる情感と草花の様子や印象が合わせて表現されています。

また、西園寺公経が営んだ北山第の上野と呼ばれる土地には、その時代に秋の野を表す景色として、ワレモコウを一面に植え楽しんでいたようです。

【参考文献】「日本語源辞典」、飛田範夫「古代・中世の庭園と園芸との関係」ランドスケープ研究、1999、河原武敏「平安鎌倉時代の庭園植栽1」信山社、2001、森蘊「平安時代庭園の研究」桑名文星堂、1945、鈴木一雄監修、国文学「解釈と観賞」別冊、至文堂、2004



現在も秋をあらわす ワレモコウ

俳句では、高浜虚子「われもまたこうありたいとひそやかに」、一休「ワレモコウさし出してはなのつもりかな」など、吾木香は現在も秋の季語として詠まれ、秋空や秋の野原、もの悲しさ、ひそやかに咲く、ほんのり赤くなど、情緒的な感情を引き起こす植物として認識されているようです。



ワレモコウの種

ワレモコウの特性

ワレモコウは、日当たりの良い野原に生息するバラ科の多年草で、7～10月に花が咲きます。茎の先に暗紅色の小さな花が密集して付き、丸く見えるのがこの花の特徴です。

3月に播種や株分けにより容易に殖やすことができます。

古名:アヤメタム、エビスネ



「山城採葉目録」
山本亡羊

(画:京都市立京都学・歴史館所蔵)

山本亡羊「山城採葉目録」(28ページ参照)から、ワレモコウは、みかげ御蔭、ありがいけ上賀茂、いわや岩屋、よしみねにしわくら良峰西岩倉、宇治で採葉されていたことがわかります。

ワレモコウの葉は5～11個の小葉からなり、三角形のそろった粗い歯牙があります。



◆栽培

【日頃の手入れと水やり】

乾燥に強く日当たりを好みます。

【用土】

土質は特に選びません。

【殖やし方】

花後にできた種子を採りまきします。京都では9～10月が適期です。

また、挿し芽で殖やすことも可能です。4～6月に花穂の付いていない芽を切り取り、水揚げしてから赤玉土などの用土に挿します。

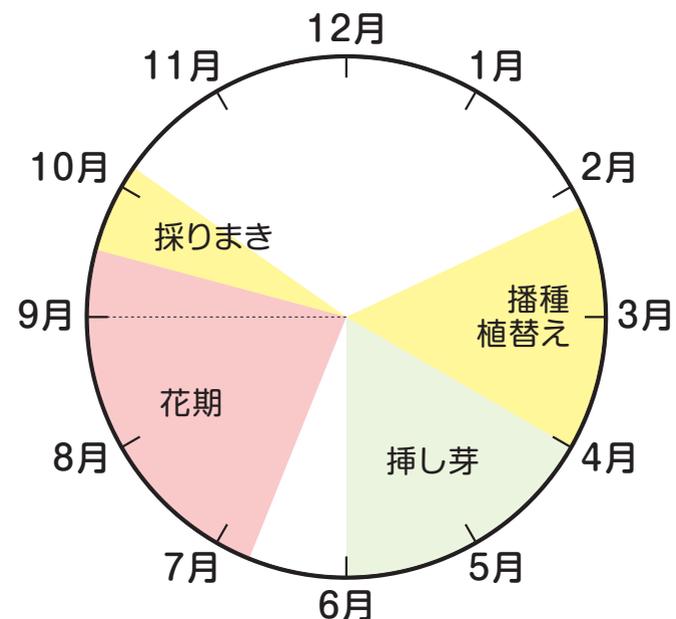
その後1週間程度は半日陰で水を切らさないようにし、発根するのを待ってから徐々に明るい場所に移します。

【病虫害】

特に心配は要りません。



栽培スケジュール



自生種のワレモコウは種からは難しいけど、園芸種のワレモコウは育てるのは簡単やわ。

ワレモコウ 京の口伝

花はかわいらしいし、
ドライフラワーにおすすめやで。



和の花を通じて理解を深める 京都の文化と自然のつながり

～各地の最近の取組～

ここでは、京都市「^{みやこ}京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」(以下「再生プロジェクト」という。)の認定を受けた活動を含め、市民団体、社寺、企業、学校、研究機関、行政など様々な団体によって担われている「和の花」保全再生や普及啓発活動の最近の動きを御紹介します。

KESエコロジカルネットワークプロジェクト 226事業所に

NPO法人KES環境機構が都市の生物多様性確保に貢献するため取り組む本プロジェクトは、平成29年度、これまでの6種の生息域外保全活動に、アヤメ(アヤメ科)、ワレモコウ(バラ科)を新たに加え(「再生プロジェクト」第16号認定)、事業所数も京都市立小学校の一部の参加も得て226に増えました。このうち、伝統行事葵祭に欠かせないフタバアオイは、参加事業所が殖やした株をNPO法人葵プロジェクトが復活を目指す上賀茂神社境内「葵の森」に里帰りさせ、祭りにいかされています。また、フジバカマやキクタニギクは、梅小路公園「藤袴と和の花展」や、京都駅ビル内の緑化展示施設「^{りよくすいほろう}緑水歩廊」での一般向け展示、



「^{きくたに}菊溪」再生(次頁参照)への株の提供につながっています。参加事業所からは「京都ならではの活動で誇らしい」という声が届いています。
(事務局=京のアジェンダ21フォーラム(京都市委託事業)、協力団体=緑化協会、京都駅ビル開発(株)、京都市)

京都学園大学・京町家セミナーで 協働の取組を考える

生態系が人間に与える恵み「生態系サービス」のうち、京都では特に重要な「文化的サービス」(生態系が文化の源泉となること)の危機が指摘されています。このため、希少植物種の保全活動が精力的に行われていますが、各団体間での課題・目標の共有や、各セクター(市民、行政、企業、大学等)の連携はまだ十分とはいえません。そこで、「生き物文化」再生に向けた協働のための取組を考える連続セミナー「『和の花』と生き物文化の再生」が京都学園大学と緑

【第1期テーマ】フジバカマ、オオキンレイカ、キクタニギク、KES活動、フタバアオイ、チマキザサ
【第2期テーマ】春の和の花展、雨庭、和の花セラピー、お香と植物、巨椋池とハス、企業緑地

化協会の共催により、平成28年10月から平成29年2月まで(第1期)及び同年5月から9月まで(第2期)の間に行われました。同大学の京町家「新柳居」(中京区)をメイン会場に、各6回にわたり、希少植物種、生き物文化、企業連携など関連するトピックをテーマとし、最前線で活動されている様々なセクターの方々を講師・コメンテーターに招いて行われました。



東山・^{きくたに}菊溪での復活を目指して 市民がキクタニギクを植栽

東山の森林景観の課題に取り組む京都伝統文化の森推進協議会(地域団体、寺院、企業、学識者、林野庁、京都市などで構成。事務局:京都市産業観光局農林振興室林業振興課)では、うっそうとしたシイ林の林相改善事業を進めています。この一環で、キクタニギク(京都府RD:絶滅危惧

種)がかつて咲いていたと伝わる菊溪、菊溪川を取り戻そうと、高台寺山国有林内のシイ等を伐採し、市内産の落葉広葉樹の苗木のほか、キクタニギク(50株)を植える活動「キクタニギクの咲く菊溪川の再生へ」が平成29年3月に実施されました。市民や関係者約100人が参加し、急な斜面



を苦にせず作業が行われていました。

その後、生育状況のモニタリング調査(京都学園大学など)も行われ、植えられた株の約8割が順調に育ち、同年10月下旬に無事に開花したことが確認されました。この試みの経験は、今後の再生にいかされる予定です。



